

陸軍士官学校と台湾人

宮崎 聖子

1. はじめに
2. 陸軍士官学校の概要
3. 台湾人と陸士
 - 3-1 台湾人が陸士に入校した背景
 - 3-2 台湾人で初めての陸士合格者
4. 考察
むすびにかえて

1. はじめに

日本の植民地における1940年代前半には、総力戦を遂行するために動員を目的とした様々な社会組織や制度が生まれた。それは植民地の日本帝国への統合が強化される過程であった。同時にこの時期、被植民者による「下からの戦争参加」¹が進んだと推測される。例えば日本植民地下の朝鮮における農村経済を研究した松本は、朝鮮における「動員」を「強制」と「自発性」の中間領域として扱い、農民の日常生活空間である村落が朝鮮人組織化の「場」として機能したことに言及している²。このように動員における「強制」と「自発性」に注目が集まるのは、それが被植民者のアイデンティティのあり方と密接な関連を持つと考えられるからであろう。そのような状況は、台湾においてもみられる。

台湾は1895-1945年の50年間、日本の植民地となった。筆者はこれまで戦前の台湾における台湾人（漢族系住民）³男子の青年団、青年期教育を研究対象としてきた。青年団は地域社会に根付いた教化団体であり、戦争末期には地域における男子青年層の労働力や兵力の動員において重要な役割を果たした。特に1940年代の台湾において、地域の青年団や青年学校は、青年男子

を徴兵制へ送出する装置の役割を果たした⁴。一方、台湾出身者が内地（「内地」は歴史的用語として用いる）のいわゆる職業軍人を養成する陸軍士官学校に入校したことはあまり知られていない。太平洋戦争末期の台湾の状況に関しては、資料の少なさとその変化の激しさもあり、不明な点も多い。しかし「戦前」と「戦後」の結節点（台湾／日本において）として、また戦後の台湾の人々のアイデンティティ構築に関わる点で研究が必要な時代であると考えられる。

ところで「動員」を辞書で引くと、以下の通りである。

- 1 軍隊を戦時編制にすること。
 - 2 資源や生産力を国家の管理下にうつすこと。「国家総一」。
 - 3 人や物をあつめて、ある目的にかりたてること。「反対運動に一する」。⁵
- 台湾人の陸軍士官学校への入校は従来制限されてきたが、戦争末期になって入校が認められた。従ってこれはある意味、徴兵制とは異なる形の被植民者の動員と考えることもできる。台湾における動員をめぐる先行研究の手法は、オーラルヒストリーを除けば主として台湾総督府など「動員する側」の視点を中心としたものであった⁶。そのため、動員される側の具体的な状況は明らかではない。そこで本稿では、「動員」を「強制」と「自発性」の中間領域とみなせるかという問題は一旦棚上げにし、台湾人が陸軍士官学校に入校した具体的な状況の一端を明らかにすることを第一の目的とする。目的の第二は、当事者にとってのその経験の意味を、ライフ・ヒストリーの視点から考察することである。

ここでいうライフ・ヒストリーとは、社会学者、文化人類学者である中野卓の視座を参照している⁷。個性を持った個人はどのように自己形成を続けていくのか、生涯においてどのような他者とめぐり合い、あるいは危機的な状況乗り越えていくのか、人々は自身の「根源的投企」をどのようにしてつかまえるのかを明らかにするための個人史のモノグラフを資料として用い、それを研究者が社会的文脈に位置付けるやり方をさす。本稿では、個人史は聞き取りにより得られた口述資料によるが、それらは現在（インタビュー時）の視点から語られたものであり、研究者による分析も現在の視点によるものである。この作業を通して、植民地期台湾におけるマクロ（政策策定者としての植民地政府）とミクロ（政策の受け手としての個人とそのアイデンティティ）の両レベルにおける「動員」の具体的把握が可能となると考える。

2. 陸軍士官学校の概要

一般に陸軍士官学校に台湾人は在籍しなかったとイメージされている。しかし戦争末期には、少数であるが存在した。聞き取りや他の研究者からの情報によると、その数は1943—45年において7～8名かと思われる⁸。陸軍士官学校は陸軍将校を育成するためのものである。将校とは、軍隊において主に兵科に属する少尉以上の軍人（士官）をいう⁹。関連する研究に広田照幸1997『陸軍将校の教育社会史——立身出世と天皇制』がある¹⁰。広田によれば、陸軍士官学校は元来、明治維新によって行き場を失った武士階級の子弟を収容するために作られたもので、当初、入校者の履歴には多様性があった。しかし陸軍士官学校の試験内容が次第に学校教育との接続性を強める中、中学校卒業生の進学先になっていったという。ただしこの研究がカバーしているのは、陸軍士官学校の将校生徒の教育や生活実態が一定の恒常性を保っていた1900—36年についてである。またその間、制度にも様々な変化があった。

日中戦争が始まった1937年に、これまでの陸軍士官学校本科は陸軍士官学校と改称され、座間（現神奈川県相模原市）に移転、天皇から「相武台」の名が与えられた。本科の前段階の教育を行っていた陸軍士官学校予科は陸軍予科士官学校と改称される。その陸軍予科士官学校は1941年に東京の市ヶ谷から埼玉県朝霞に移転し、天皇から「振武台」の名が与えられた。また1937年には「航空兵科将校となすべき生徒及び学生」の教育を行うために、陸軍航空士官学校分校（本科に当る）が設置された。1938年12月、陸軍航空士官学校分校は陸軍航空士官学校（豊岡、現埼玉県入間市）として独立し、「修武台」と名づけられた。

陸軍士官学校の制度は時代により変遷があるが、本稿では原則として、台湾人の入校に関連する1941年以降の陸軍予科士官学校と陸軍士官学校（本科）に限定して述べることにする。なお本稿では、陸軍予科士官学校と陸軍士官学校（本科）を一連のものとして表記する場合、「陸士」と省略するが、両者を区別する場合は「陸軍予科士官学校」、「陸軍士官学校（本科）」と表記することとする。

この時期、陸軍予科士官学校の教育期間は2年間で¹¹、それに続いて陸軍士官学校（いわゆる本科）に入校し、そこでは約2年間の教育を受けることになっていた¹²。本科に1943年4月に入校した第58期生は1945年3月に卒業

しているが、後述するように、1944年、1945年の本科入校者（第59、60期生）は、在学中に終戦を迎えている¹³。

陸軍予科士官学校では授業料はかからない。陸軍士官学校（本科）を卒業すれば見習士官を経て、少尉（＝「高等官」）となることになっていた。すなわち、陸軍士官学校は20歳くらいで高等官となることができる一つのチャネルであった。もちろん戦死する可能性はあるが、かつて陸軍士官学校に在籍した比留間（1944年6月に陸軍士官学校を卒業）によれば「戦死をするにしても、死ぬまでなんとか食わせてくれる…略…生き残れば恩給があって、これまた死ぬまで食うことができる」¹⁴と考えられていたのである。2年間の陸軍予科士官学校の卒業が近まると、兵種（輜重兵、工兵、砲兵、騎兵、歩兵、航空兵など）が本人の希望を勘案しつつ決定され¹⁵、引き続き陸軍士官学校（本科）で専門の教育を受けた。

3. 台湾人と陸士

3-1 台湾人が陸士に入校した背景

台湾人に陸軍士官学校の門戸が開かれたのは、第59期の将校生徒募集（1942年）からである。それまで「台湾人は陸軍士官学校に採用しない」という成文規定があったのかどうかについて公文書では未確認であるが、故地を中国大陆に持つ台湾人¹⁶に対して日本人は懐疑的であり、徴兵義務のない台湾人は職業軍人（武官）には採用しないという不文律が存在したのかも知れない。陸軍が台湾人を採用した年の生徒募集は1942年3月12日の陸軍省告示第10号により行われたが、その文面自体は前年と何ら変わるところがなかった¹⁷。

台湾人が陸軍士官学校生徒に採用されたことの背景には、以下のことがあげられる。一点目は、台湾では1942年4月に台湾人に対して陸軍特別志願兵制度が施行されたこと¹⁸、二点目は、少数先住民（いわゆる高砂族）の軍属が南方の戦地で戦果を収めていたことである。日本は太平洋戦争の初期には勝っていたものの、その後1942年6月のミッドウェイ海戦、11月のガダルカナルで敗北を喫した。またこの頃、同盟国のドイツも敗色が濃厚となった。1943年9月8日に閣議で台湾における徴兵制度実施が決まると¹⁹、台湾人を武官に養成することを妨げる要素はさらに少なくなったと言える。陸軍士官

学校における収容人数を示したのが、表1である。これをみると、日中戦争の開始から陸軍予科士官学校の入校者数が急激に増え、本稿で事例として扱うSさんが入校した60期にいたっては、これまでで最大の4800人となっていることが分かる。参考までに、以下に1943年の陸軍士官学校の綱領の第一（本校教育の目的生徒の本分）をあげる。

陸軍予科士官学校の綱領 第一（本校教育の目的、生徒の本分）

本校ハ曩ニ畏クモ龍駕親臨ノ榮ニ浴シ振武台ノ名ヲ賜ハリシ聖地ナリ 而シテ本校教育ノ目的ハ生徒ニ皇国陸軍将校タルニ必要ナル資質ヲ付与スルニアリ 故ニ生徒ハ夙夜聖諭ヲ奉体シ左記要綱ノ修養具現ニ邁進スルヲ以テ本文トスベシ²⁰

ところでこの時期の陸軍予科士官学校へ入校するには、主に三つのルートがあった。一つは中学校からの受験であり、中学生にとって陸軍士官学校は「一高、海兵、陸士」と並び称される憧れの進学先であった。第二は「陸軍

表1 陸軍士官学校の卒業と入校における人数

		本科卒業		予科入校				本科卒業		予科入校		
1925	37期	300	41期	280	1938	50期空	40	51期地	461	55期		
1926	38期	339	42期	222		51期空	45		52期地	508	56期	
1927	39期	292	43期	244	1939	52期空	127					
1928	40期	225	44期	342		1940	53期地	1365	—			
1929	41期	239	45期	365	53期空		354					
1930	42期	218	46期	346	54期地		1798					
1931	43期	227	47期	347	1941	55期地	1755	54期空		388		57期
1932	44期	315	48期	392		55期空	595	56期地		1762		58期
1933	45期	337	49期	492	1942	56期空	627	59期				
1934	46期	338	50期	513		57期空	1131	57期地		1550		60期 4800
1935	47期	330	51期	570	1944							
1936	48期	387	52期	643		58期						
1937	49期	471	53期	54期	1945							
	50期地	426										

空＝航空兵科、地＝地上兵科 『60期生史』 p.4より

の中学校」とみなされていた陸軍幼年学校を卒業し、無試験で入校することである。第三は、現役下士官など軍内部からである。ただしこれは日常の軍務をこなしつつ試験勉強をし、所属部隊長などの内認を受けた上で中学生と同じ選抜試験を受ける必要があったので、実際にはかなり困難であった²¹。次に、台湾人に関連する中学校からの陸軍士官学校入校について、事例に基づき述べることにする。

3-2 台湾人で初めての陸士合格者

1942年3月12日陸軍省告示第10号によれば、中学校から陸士へ志願する際の資格は次の通りであった。「大正12年4月2日より昭和2年4月1日までに生まれた者。満16歳から20歳まで。学科試験は中等学校第4学年1学期修業の程度を基準とする。学歴に制限はない。ただし以下の者は採用しない。妻ある者、破産の宣告を受け、復権を得ざる者、禁固以上の刑に処せられたる者、素行修らざる者」。志願者は所定の会場で身体検査を受けた後、さらに学科試験を受けた。学科試験は1942年8月29日より3日間で、試験科目は、国語、作文、数学、歴史及地理、理科である。台湾での受験場は台北、台南の2か所があった。

本項では、日本の中学校から受験し、台湾人で初めて陸軍予科士官学校に合格した（採用予定者となった）Sさん（1925年生まれ、仮名）の経験を紹介する。1943年3月の『台湾教育』では、台湾人から初めて陸士合格者が二人出たことを報じている。その記事の中で台湾軍報道部長の藤岡は、台湾人における陸士合格者の嚆矢となった二人について述べている。この二人とは、台南二中第4学年在学中の森本憲一郎（旧名 林宗棟）と日本の尽誠中学第4学年在学中のSさんである。記事によれば、森本氏は温厚誠実にして勤勉、責任感強く志操堅固、中学入学以来常に成績は首位、と紹介されており、台湾電力会社社員の父親をもち、三人の弟妹がいる。また家庭は、1937年に台南州知事から国語（日本語）常用家庭として表彰を受けたという。Sさんのほうは温厚誠実勤勉、不言実行志操堅固、中学入学以来常に成績首位、と紹介されている。父母は永年訓導をつとめ、国語常用家庭として台北州で最初の認定家庭となったという。記事は、この二人の合格が青年たちや近隣に与えた影響は大きい、と報道している²²。

後に述べるようにSさんはこの記事の1943年3月の時点では採用予定者と

なったが、その後の身体検査で不合格になり、次の年に再度受験し、合格、入校している。一方、靖国偕行文庫²³に問い合わせたところ、森本氏は1943年4月に59期で入校したことが同期生名簿より分かった。しかし1998年に故人となられている。

筆者はSさんとは人の紹介を通して知り合った。調査当時Sさんは83歳であった。Sさんにお会いする以前、元軍人ということで、体格がよくいかつい男性を想像していた。しかし待ち合わせの公園に現れたのは、身長165センチ位の小柄で柔和、昔は文学青年だったのではないかと思わせるような人であった。しかし声が大きく、早足で歩く姿は矍鑠としていて、その点はかつての軍人らしかった。インタビューは2009年3月に台北市のご自宅で2回行った。時間は1回につき約1.5～2時間で、使用言語は日本語である。インタビューは断って録音させて頂き、文字化した。以下は同氏から聞き取りをした概要であるが、分かりやすくするため、Sさんの経歴を時系列で並べている。

(1) 日本（内地）の中学へ

Sさんは公学校（台湾人を対象とした初等教育機関）教員の両親をもち、台北州羅東郡羅東街で育った。父親は三峡（台北州）、母親は樹林（台北州）の出身である。母親は第三高等女学校の前身である学校（台湾人女性にとって台湾における最高の教育機関）を卒業したというのであるから、その家格の高さが推察される。Sさんは日本人経営の日本語で教育を行なう幼稚園に4歳で入園し、1938年3月に羅東小学校を卒業した。小学校は日本人の生徒が主体で台湾人の子どもはほとんどおらず、日本人向けの教育を行っていた²⁴。

Sさんは台湾の中学（日本語による教育を行なう）を受験するが、それに失敗してしまう。彼は台北二中を受けて一次の筆記試験には合格したが、二次の面接では不合格だった。Sさんによれば、台湾の中学校では日本人生徒は優遇される一方、台湾人生徒の定員枠は決まっていたため、二次試験で台湾人は筆記試験のできよりも家柄のいい人が優先されたのだという。自己採点の結果を知ったSさんの担任である日本人教員も、彼の不合格をいぶかった。Sさんはその後、1938年7月までの数か月間を小学校高等科で学んだ。

彼の小学校5、6年生の時の担任は台湾人生徒の教育に熱心な日本人で、Sさんが台北二中に合格しなかったことを残念に思い、彼を日本内地に行か

せるよう父親に勧めた。当時の羅東郡守梅谷修三が香川県善通寺の尽誠中学の出身だった縁で²⁵、Sさんは尽誠中学（5年制）²⁶を受験することになった。梅谷の関係で、この尽誠中学には以前から数人の台湾人学生が在籍していた。善通寺は1898年から第11師団が置かれた地域であり、台湾総督（1896—98年）であった乃木希典が1899年から師団長を務めたところでもある。Sさんは受験のため1938年8月に善通寺へ渡り、そこの高等小学校で補習を受けて尽誠中学を受験し、1939年4月に入学した。この時親代わりとなったのが、尽誠中学の校長だった。Sさんは当初、校長の家に世話になっており、その妻がふとんなどの生活用品を用意してくれたという。その後下宿を見つけて入居し、中学での生活は楽しく充実していた。下宿は最も安いところを探し、下宿代は月15円だった。生活費は毎月台湾から為替で仕送りをしてもらっていたという²⁷。同じ下宿には日本人将校が住んでおり、Sさんを弟のようにかわいがった。

(2) 内地で得た自由

Sさんは善通寺において、台湾島内のような差別を受けなかった。善通寺には朝鮮人労働者がおり、その子弟は「朝鮮人」と言われ差別されていたのに対し、台湾人は裕福な「留学生」という扱いだだったという。彼自身も下宿などにおいて「日本人にまじって生活していた」ので、全く差別は感じなかったという。

彼は授業料を半分免除される特待生となった。特待生になるには各科目が80点以上、科目の平均が90点以上でなければならない。筆者が「人生で一番嬉しかったのは、どんなことですか」と質問した際に、Sさんは「日本に行って認められたとき。尽誠中学に入学したことだけでなく、その後も含めて。」と答えた。「台湾の小学校時代（1—4年生）の日本人の先生は厳しくて、自分はいつも『だめだ、だめだ』と叱られてばかりでした。台湾では中学校への入学も、試験の成績がよくてもコネがなければ難しかったです。でも、尽誠中学の勉強は簡単だった。…略…日本では陸士を志願したら受け付けてくれたけれど、もし台湾にいたら、陸士に志願しようとしても『そんなことはするな』と周囲から止められたでしょう」と語った。

彼は中学在学時は高等学校を受けようと、旺文社の『蛭雪時代』を買ってきて勉強していた。しかし中学4年生のとき、当時親代わりだった校長にす

すめられるまま、「何も考えないで（Sさん）」陸士を受験した。

(3) 台湾人初の陸軍予科士官学校合格

1942年夏、中学4年生の時、Sさんは陸軍予科士官学校を両親にだまって受験し、いったん合格する。両親に相談しなかったのは、戦争のために交通事情が悪化し、台湾と連絡が取れにくくなっていたためであった。受験を勧めたのは、Sさんの成績が優秀であることを見込んだ中学校長である。ただし校長は、従来朝鮮人は受験できても、台湾人はできない（厳密に言えば、受験しても合格しない）ことを知らなかったという。Sさん自身も、「日本人にまじって暮らしていたから」当然自分は受験できると考えたという。合格発表は他の学校よりも早い1943年1月だった。Sさんは新聞記者の取材を受けて、陸士初めての台湾人合格者となったことを知った。しかしその後、陸軍予科士官学校に到着し、仮入校の際に受けた身体検査で不合格となる。Sさんはこの不合格を「持病のせいで」と筆者に説明した。同じ時期に森本氏が入校しているの、Sさんの不合格はその言葉通りであったのだろう。

採用予定者の最終的な採否は、この身体検査後に初めて決定されるので、在学中の中学に対する退校手続きは採用決定後にしてよいことになっていた²⁸。Sさんは陸軍予科士官学校に合格できなかったため、善通寺に戻って中学生生活を続け、病気治療も行い、1943年夏に再び陸軍予科士官学校を受験した。そして晴れて合格となる。筆者がSさんに「なぜ陸士を受験したのか」とうかがうと、校長に勧められたために「何も考えずに」受験したのだという。また最初に受験した1942年夏当時の状況について彼は、「日本は当時（戦争に）勝っていました。ですから（陸士入校には）とても希望が持てたんです」と述べている。日本は1942年6月のミッドウェイ海戦で大きな損失と戦死者を出していたが、日本の負け戦は一般には知らされていなかったと思われる。彼は1943年に海軍兵学校も受験しており、一次試験は合格したが、こちらは最終的に不合格になった²⁹。

1944年3月に、Sさんは陸軍士官学校第60期生として陸軍予科士官学校に入校した。Sさんによれば同期の台湾人に台南一中出身の台湾人がいたという。ちなみに、彼は陸士においても本名である台湾名を使用していた。台湾から応募した人々の場合、陸士では日本名を使用していた者もいたが、彼はおそらく「内地への留学生」という形で受験したため、台湾当局からの干渉

がなくその名を継続して使用できたのだろう。予科士官学校では宿舎、食事は全て支給され、小遣いももらえたという。60期生においては航空正規将校の大量養成のため、予科の教育期間が当初の1年8か月から1年間に短縮された³⁰。Sさんは陸軍予科士官学校を1年で卒業し、1945年3月に陸軍士官学校の本科にあたる陸軍航空士官学校へ入校した。

陸軍航空士官学校の入校式は1945年3月27日だった。本科においても宿舎、食事は支給された。Sさんによると、予科までは学生の身分であるが、本科に入ると正式な軍人となる。ただし、給与はない。そして陸軍士官学校を卒業すると、「見習士官」となって給与を受け取り、それを1年間つとめると³¹、少尉に任官する予定であった。

本科の兵科の決定に際しては、従来本人の希望を提出させてそれが勘案されていたのが、Sさんたちの場合、その希望は聞かれなかった。すでに特攻が始まっていた時で、Sさんは希望が聞かれないまま「航空一次」に振り分けられた。この時期、航空兵科が大所帯となり、訓練施設が不足していた関係で、60期生は航空一次と航空二次に分けられて、訓練が行われた。航空科に進んだのは60期の約4800人のうち3000人と、多数（62%）を占めている。うち半数の約1500人が一次、残りの半数の1500人が二次であった³²。

初期の陸軍航空士官学校は希望者の多い花形で、Sさんによれば、生徒たちは「大空を駆けめぐる」というロマンチックな夢を抱くことができたそう。しかし、そのような状況に対し1944年5月頃、陸軍大臣東条英機は綱紀粛正が必要と考え、学科は航空科出身の教員が担当したものの、実地訓練には歩兵出身の教官を増やしていった³³。そのため、Sさんたちは出身の異なる教官たちに「いじめられた」という。「いじめ」とは、いわゆる「鉄拳制裁」や「しごき」をさす。他の60期生の手記によると、教官だけでなく区隊長などによっても彼らに対して激しい制裁がなされていた模様である。

Sさんたちは「日本の軍隊は勝つか死ぬかのどちらかで、負けはない」と教えられた。また学科の講義の中で、航空科の教官たちが「今の状況ではとても日本は勝てない」ということを洩らすのを聞いた。航空機の構造や部品などについて学んでも、それは特攻用の必要最小限のもので、航空機は実際には敵艦の傍まで行けないようなものだったという。Sさんの語り口は淡々としていたが、当時の陸軍航空士官学校には絶望的な空気が漂っていることが推察される。

(4) 終戦

1945年になると空襲が激化し、もはや学校において操縦教育などの教育を行うことが不可能となったため、訓練を満州で行うことになった³⁴。Sさんらは7月28日に舞鶴港から、飛行訓練のために満州へ渡ろうとして船（帝立丸）に乗り込んだ。しかし米軍機による機雷投下で船は沈没³⁵。船長が船体を半分陸に乗り上げたため彼は九死に一生を得るが、この時、満州へ移動するつもりで携行していた数少ない身の回り品全てを失ったという。その後、東京に戻ろうとしていた途中の福知山で玉音放送を聞いた。ただしSさんは、その時は何を言っているのか、よく分らなかったようだ。Sさんらは列車で東京に着くと、降伏を拒否する陸士の反乱をおそれた当局により、埼玉県寄居の山中に収容された。解放されたのは9月2日だった。

航空士官学校に入校後、Sさんの階級は「兵長」になった。これが彼の最終的な階級であった。Sさんによれば、兵長は上等兵と伍長の間に後から創設されたものだという。彼が当初予定していたであろう少尉に任官する以前に、日本帝国は崩壊したわけである。

(5) Sさんの「戦後」

Sさんは終戦にどのように対応したのだろうか。彼が20歳になろうとしていた矢先に、日本の敗戦となった。その時は「もうどうしていいかわからない状態」だったという。東京は焼け野原になっており、そのような光景を見たのは初めてであった。とにかく行くあてがないので、すぐに尽誠中学の校長を頼って善通寺に戻った。校長は親切に彼を迎え入れ、家に住ませてくれたという。そうこうしているうちに、善通寺にいた台湾人の知人が高松で開かれた台湾出身者の会合で得た情報として、台湾へ帰還する船が出ると教えてくれた。1946年2月、Sさんはその船に乗りこんだ。善通寺、尾道を通じて天草まで来た時に、船が座礁してしまった。そこで駆逐艦に乗り換え、台湾の基隆（台湾北部の港）へ到着した。船賃は無料だったが、それを誰がしてくれたのかはわからないという。

その頃、Sさんの父親が宜蘭（台湾北部の市）のセメント会社に勤めていた。彼はそこでしばらく「工員のような仕事」をした。しかし4月か5月になって、新制大学を受験できることを知り「勉強しないといけないと思った」。彼は日本から本だけは持って帰ったので、その参考書で勉強を始め、その年

の半ばに台湾大学（前身は台北帝国大学）を受験した。大学側は当初、Sさんの陸士の学歴では受験資格を認められないと言っていた。大学受験には、初等教育修了後6年間の教育期間が必要であった。尽誠中学の5年間と陸軍予科士官学校の1年間を合わせると6年であるが、予科士官学校では午前は座学、午後は教練という教育内容だったため、それを1年間として認めることはできない、ということであった。Sさんはこれを認めてくれるよう教務課長にかけあっていたが、埒があかないので台湾大学の校長（学長か）にかけあった結果、受験できることになったという³⁶。

合格した大学では電気学科で「弱電」を専攻し、卒業後は電信局（日本の日本電信電話公社に相当）に定年まで勤務した。電信局の幹部は全て日本に留学経験のある中国人（国民党とともに台湾に渡ったいわゆる「外省人」）であった。一般に台湾人で親日的な人や日本と関係の深かった人は、かつて日本と戦った国民党や外省人から白眼視される傾向がある。しかし、Sさんによれば、彼自身はそのようなことは全くなかったし、自分が陸士出身であることを隠したこともないという。Sさんは電信局に勤める傍ら、知人に頼まれて化学薬品メーカーに投資をし、1968年からその会社の役員をつとめ、現在は悠々自適の生活を送っている。

Sさんに「人生で最も辛かったことは何ですか」とたずねると、「（自分の）人生は目標をもってやってきたわけではなくて、行きあたりぼったりだったけれど」、と前おきした上で、それでも「陸軍士官学校（本科）に入る際、兵科の希望を尋ねられずに航空科に配属されたことにはがっかりした」と語った。配属されるなり、歩兵出身である実科教官の「お前ら、絞ってやる」という態度を目の当たりにした。また航空士官学校では、予科と異なり、朝鮮、台湾生まれの日本人が朝鮮人・台湾人に対する差別意識を他の人に吹き込むのもいやだった。本科には予科からいろいろな人が入校しているので、Sさんは本科の同期にそれほど親しみが湧かなかったという。彼は「終戦になったときね、航空士官学校の同期はお前どうするんだ、と誰も僕のことを心配してくれなかったですよ」と悲しそうに語った。ただし陸軍予科士官学校の同期とは仲がよく、今でも連絡がある。

4. 考察

本項では、台湾人であるSさんが陸軍士官学校に入校した経緯を改めて検討し、また同氏にとって陸士入校がどのような意味を持つのかについて考えてみたい。

Sさんの陸士入校には、その前段階としての中学入学と、入学のきっかけを作った日本人がキーパーソンとして登場する。台湾島内において、台湾人に対する教育機会は小さく抑えられてきた。Sさんが台湾での中学受験に失敗し、尽誠中学を受験する時は、小学校の日本人担任の勧めと梅谷郡守のコネによった。次のキーパーソンは、日本で親代わりとなった尽誠中学の校長である。中学校で成績優秀だったSさんに対し、従来台湾人は受験できないとは知らずに校長は陸士受験を勧める。その言葉に従って、Sさんは陸軍予科士官学校を受験した。ただしこの時は最終的には採用されず、次の年に陸士入校が決まった。

陸士に台湾人を入れるようになったことは、戦争遂行体制を固めるという意味で「動員」といえるかも知れない。当時、「打って一丸」となって敵国に対抗するためには、被植民者を制度的にも精神的にも日本帝国の一部として統合し、それを一般にも知らしめる必要があった。また戦局の悪化から、航空兵科将校の養成・補充は喫緊の課題であった。先に述べたように、60期生の6割が航空士官学校に收容されるほど戦局は差し迫っていたのである。小柄なSさんが採用されたのも、もとより航空兵としての配属を想定してのものであったのかも知れない。ちなみにSさんと同時に合格した森本氏も、「戦闘機乗り」として養成された³⁷。

一方Sさんの立場からすると、陸軍士官学校は進学／就職先という意味合いが強かったと思われる。ある台湾人の中学校卒業生（1925年生まれ、台南一中卒）によれば、陸士が台湾人に開放された当時、台湾人にとって、高等学校よりも陸士に入るほうが価値があると考えられていたという。なぜなら、台湾人はたとえ東京帝大を卒業して高等文官試験を受けたとしても、差別のために合格できないと考えられていたからである。下級官吏は別として、高等文官への道には被植民者に対する厚い壁がある、と認識されていた。また同氏によれば、高等学校卒業生であっても、大企業は台湾人を採用することはほとんどなかったという。しかし陸士を卒業して経験を積み、高等官に

なることも夢ではない。しかも在学中はお金がかからない。おそらくこの頃は軍国主義の風潮が強まり、台湾人男性の一部には「お国のために自分も」といった傾向も顕著だったと思われる。

ただし、陸士入校は軍人として命の保証のない職業につくことを意味した。もちろんSさんが陸士受験を決めた1942年には、日本が勝つと信じていた。しかし親にだまって受験したのは、そのことに対する遠慮のような気持ちが働いたためであろう。結果として、戦局は一挙に悪化し、終戦間際における陸軍航空士官学校への入校は、特攻を前提とした将校の養成であり、ほとんど死を運命付けられたものだったわけである。

こうしてみると学歴を求めたくとも行き先のない（限られている）台湾人と、大量の航空兵科将校を必要としていた帝国や陸軍の利害が交錯したところに、Sさんの陸士入校が位置づけられる。ただし彼は日本（内地）の中学を経由した事例であり、本稿では台湾から直接受験した人などについて調査を行っていないので、今後はそれらを含めた検討が必要である。

次に、Sさんにとって陸士の経験を考えてみたい。「日本（内地）に行って認められた」という言葉に表されているように、中学入学と陸士入校は、台湾で受けてきた差別への抵抗という一連の語りの中で語られた。台湾における小学校4年生までは、Sさんは日本人教員によって日ごろから「だめだ」と否定されることが多かった。しかし日本内地ではそのようなことはなく、日本への移動によって、世界観が変わった。尽誠中学には彼以外にも台湾人学生が在籍し、Sさんが「裕福な留学生」とみなされていたことも、日本での差別を避けられた一つの要因であろう。「日本に行って認められた」という語りは、否定されてきた自己を取り戻すといった「力を得た感覚」を表現していると思われる。そして中学入学が陸軍予科士官学校入校へのさらなるジャンピングボードとなった。従って彼の日本行きには、地理的移動と階層移動の二つの意味が伴った。陸軍予科士官学校においては学生の身分でもあり、差別を受けることもなかった。彼は日本行きを総括するように、「日本でやったことは、全て自分で決めたんです」と、自律性を手に入れたことに言及した。

ただ陸士とは言え、陸軍予科士官学校と陸軍航空士官学校（本科）に対する彼の感じ方は全く異なっている。陸軍航空士官学校に一方的に指定された時には、戦局はすでに悪化していたし、彼は教官による暴力の中で絶望を感

じたという。また同期とのつながりも薄く、台湾人であるために差別を受けた。Sさんにとって、陸士の予科と本科は異なる意味を持っていたと言える。日本の敗戦によってSさんのキャリアは本意にも絶たれたわけだが、航空士官学校での待遇はその前触れであったわけである。

しかしSさんの本領発揮はそれからであった。台湾に帰還後、すぐに台湾大学を受験し、新たな時代への切り替えの早さを見せている。大学卒業後は電信局に勤め、その後は比較的順風の人生だったと言ってよいだろう。1960年頃、日本電信電話公社での研修を受けるため、初めて仕事で日本へ行った時に、予科で「寝台戦友」だったTさんが皆を集めて東京池袋で歓迎会を開いてくれたという。これがもともと予科の同期会が始まった³⁸。

筆者は、Sさんが日本陸軍軍人であったことで戦後にたいへん苦勞したのではないかと予想していた。なぜなら、戦後に多くのエリート台湾人が「親日」を理由に、政権を担当した国民党の迫害に遭っているからである。しかし予想は違った。Sさんによれば、電信局の同僚には戦後大陸から台湾に渡ってきた「外省人」も多かったが、彼らの多くは日本で教育を受けたり、満州で日本の教育を受けた（中国の）人たちだった。彼らはいわゆる「日本通」であり、そのためにSさんは困ることはなかったし、自身も陸士出身者であることを隠したことはない。ここでは日本で教育を受けた彼の経験が、図らずも資源となっていることがうかがえる。陸士に対する彼の総合的な評価は、そのような背景と予科同期の存在によって、悪くはないのであろう。

彼が戦後に迫害に遭わなかったことの背景の一つには、台湾大学卒業という、体制内での高い地位を比較的早期に獲得したことにもよると考えられる。台湾大学入学を可能にしたのは、それまでにつんだ学歴／学力に由来すると考えてよい。さらに大陸から逃れてきた国民党は、新政権と共に渡台した中国人のみを登用していたのでは、将来人材不足に陥ることを見越していたと思われる。特にSさんのような技術系の人材は、日本が台湾に残していった制度や資源を流用・運営するために重要だったのではないだろうか。

Sさんの「戦後」への適応は柔軟で、驚くべきものがある。この切り替えの素早さは、大学進学だけでなく、彼の言語習得にも現れている。彼は戦後、大学で中国語を学んだ。電信局における同僚との日常会話は台湾語で行ったが、仕事は中国語で行った。彼において常に首尾一貫していたのは、「体制内で精一杯がんばる」ということであったと言える。

むすびにかえて

マクロな視点から見た場合、陸軍が1942年に生徒募集を出し、台湾人を陸士に入校させたことは動員の一環として考えられる。入校には試験が設けられ、表面上は「台湾人に陸士入校が許された」という体裁をとっていた。ただしそれは日本帝国が崩壊する寸前のことであった。60期生に対する陸軍予科士官学校の教育は当初予定の半分の1年間に短縮され、その後生徒の多くは特攻を前提とした陸軍航空士官学校へ有無をいわず送られた。また大量に採用されたそれらの人々は、戦局の悪化によりまともな訓練を受けることはなかった。一方、差別を逃れたいと陸士に入校したSさんも、その一人であった。当事者によるミクロな視点に立てば、陸士への入校は自らの生き残りや社会的上昇の戦略と考えることができる。

こうしてみると、動員を強制と自発性の中間とみなすアプローチは、特定の時期については有効であるかも知れない。しかし、1940年代のように政策が急展開を告げる時期においては、マクロとミクロの複眼的な視点を保持することが、政策をとらえ、同時に当事者の視点を明らかにする上で必要であろう。ただし本稿では、台湾人の陸士入校について一例を明らかにしたに過ぎない。他の事例については不明であり、今後さらに解明をすすめる余地がある。また陸士における朝鮮や満州出身者との比較の視点も今後必要となろう。

謝辞 本研究において、Sさんには長時間にわたるインタビューにご協力頂きました。本稿の作成に当っては、台湾史研究家三田裕次氏から多くの資料の提供・寄贈を受け、草稿の段階においても有意義なコメントを頂きました。靖国偕行文庫にはお忙しい中、史料の確認にご協力頂きました。皆様に厚く御礼申し上げます。ただし本研究についての責任は、全て筆者にあります。

註

- 1 用語としてはさらなる検討を要するが、ここでは暫定的に用いる。
- 2 松本武祝2005『朝鮮農村の〈植民地近代〉経験』社会評論社 p.198。
- 3 「台湾人」の呼称について、現代の台湾社会では様々な議論があるが、ここでは戦前に主として「本島人」と呼ばれた漢族系住民を指すこととする。

- 4 宮崎聖子2008『植民地期台湾における青年団と地域の変容』御茶の水書房。
- 5 金田一京助ほか編1975『新選国語辞典』小学館による。
- 6 例えば以下のような研究が挙げられる。
林蘭芳 1996「日抛末期台湾「皇民奉公」運動(1941-1945)」『中華民國史專題論文集』pp.1193-1236
周婉窈2003『海行兮の時代——日本殖民統治末期台湾史論集』允晨
楊雅慧1993『日抛末期的台湾女性与皇民化運動』『台湾風物』43卷2期台湾風物雜誌社台北県 pp.69-84
近藤正己1996『総力戦と台湾——日本植民地崩壊の研究』刀水書房
- 7 中野卓2003『生活史の研究』東信堂 p.67。中野によれば、人間の人生は個人史として社会史と交差しており、両者は互いに補強しあうことができる。それはどちらも架空の物語ではなく、共に本人・研究者双方にとって歴史的現実としての信憑性(authenticity)を備えた歴史として再構成されるものだからである。
- 8 元陸士のSさん(陸士60期)は、戦後に入学した台湾大学において、自身より一期下の61期入校の台湾人と出会い、61期はその人の他に3-4名いる、と聞いたという。
- 9 広田照幸1997『陸軍将校の教育社会史——立身出世と天皇制』世織書房 pp.31-32。
- 10 広田1997。
- 11 昭和12年4月7日勅令111号「陸軍予科士官学校令」、昭和12年9月30日勅令第567号「陸軍予科士官学校令中改正」、昭和15年10月22日勅令第690号「陸軍予科士官学校令中改正」、昭和16年4月8日勅令406号「陸軍予科士官学校令中改正ノ件」。
- 12 昭和13年勅令745号「陸軍航空士官学校令」。
- 13 六十期生会編1978『陸軍士官学校第60期生史』発行者 六十期生会、発行所 財団法人偕行社内(以下『60期生史』)p.350。
- 14 比留間弘1983『士官学校よもやま物語』光人社 p.10。
- 15 比留間 1983 p.96
- 16 台湾に暮らす人の大部分はいわゆる漢人であり、対岸の福建省や広東省から16世紀以降移住してきた人々であった。
- 17 1942年3月12日陸軍省告示第10号「昭和18年入校せしむべき陸軍予科士官学校生徒、陸軍経理学校生徒及陸軍幼年学校生徒を左の各号により採用す」(1942年4月19日『台湾総督府官報』第16号)。
- 18 宮崎2008 pp.282-285。
- 19 近藤1996 pp.51-55。なお、朝鮮における徴兵制実施の決定は台湾より早く、1942年5月8日の閣議でなされた。
- 20 『60期生史』 p.106。
- 21 比留間 1983 p.8。
- 22 1943「志願兵の応募と陸士合格の本島二青年」『台湾教育』3月号 488号 pp.33-35。藤岡によれば、軍医将校として在籍している台湾出身者は存在するが、将校として正式な教育を受けるのはこの二人が最初であるという。
- 23 靖国神社の一角にある靖国偕行文庫は、財団法人偕行社から建物と蔵書が奉納され、

- 靖国神社創立130年を記念して平成11年に開館した。靖国偕行文庫ホームページより。
<http://www.yasukuni.or.jp/archives/index.html> 偕行社とは、1877年に創立された陸軍将校の集会の場所から発展した、将校の親睦・共済団体である。戦後は解散させられたが、その後陸軍関係の戦争犠牲者の福祉増進と会員の親睦を目的とする財団法人に生まれかわり、現在にいたっている。偕行社ホームページより2010年10月15日取得。
<http://www.kaikosha.or.jp/kaikosya-gaiyo/rekisi.html>
- 24 一般の台湾人は、台湾人むけ初等教育機関にあたる公学校に収容された。公学校では原則として日本語による教育が行なわれたが、人々の日常生活は現地の言語である台湾語によっていた。
 - 25 梅谷修三は尽誠中学校を1916年に卒業、第六高等学校を経て東京帝国大学法学部卒業。高等文官試験に合格し、昭和初期に台湾に着任。終戦時には台湾総督府の内務部長として終戦処理にあたった。尽誠学園百年史編纂委員会編1987『尽誠学園百年史』学校法人尽誠学園 pp.438。尽誠中学は現在の尽誠学園の前身である。
 - 26 尽誠中学の卒業者は、普通文官任用令により判任文官の資格を得る。中学で年間に必要な学費は89～146円(1941年)であった。尽誠学園百年史編纂委員会編1987 pp.398-399。
 - 27 Sさんによれば、当時台湾の実家には住み込みの女中が2、3人いたが、彼女たちの月給は5円だったという。
 - 28 1942年3月12日陸軍省告示第10号による。
 - 29 Sさんによると、二次試験の後、学校から特に「合格した」との連絡もなかったので、不合格になったのだろうと判断したそうだ。
 - 30 『60期生史』 p.314には、遠藤三郎氏(航空士官学校校長)が1943年7月に教育総監部へ提出した「航空将校の急増大量養成案」で、予科士官学校の教育を1年にするよう提案した、という記述がある。ただしそのことを決定したという公文書を筆者は確認できていない。
 - 31 Sさんによれば、「見習士官の期間は1年」だが、昭和19年7月に陸軍省が出したPR書『陸軍予科士官学校』によれば、4ヶ月間となっている。『60期生史』 p.200。
 - 32 『60期生史』 p.352。
 - 33 『60期生史』 p.353。
 - 34 『60期生史』 p.349。
 - 35 『60期生史』 p.348にも同様の記述がある。
 - 36 一方、日本人の陸軍士官学校60期生の転入学については、高等専門学校(旧制。教員養成諸学校を含む)第二学年へ転入の資格が与えられた。60期生の回想録によれば、志望校を第七まで書いて提出し、銓衡の結果、転入学が許可された。ただ学校によっては、マッカーサー司令部の圧力によるものか、転入学を許可した後にそれを取り消すところもあり、陸士生の転入学の道も厳しいものであったという。『60期生史』 pp.470-471。
 - 37 靖国偕行文庫への問い合わせによる(2010年10月)。
 - 38 Sさんによれば寝台戦友とは、ベッドが隣あう二人が一組となり、互いにめんどろを見合うものである。「重陽会」と名づけられたこの同期会は、会員が高齢となったため、2008

年以降、開くのはやめることになったという。

引用・参考文献

和文

- 近藤正己1996『総力戦と台湾——日本植民地崩壊の研究』刀水書房
尽誠学園百年史編纂委員会編1987『尽誠学園百年史』学校法人尽誠学園
太平洋戦争研究会2002『日本陸軍がよくわかる事典』PHP 研究所
太平洋戦争研究会2005『太平洋戦争主要戦闘事典』PHP 研究所
中野卓2003『生活史の研究』東信堂
比留間弘1983『士官学校よもやま物語』光人社
広田照幸1997『陸軍将校の教育社会史——立身出世と天皇制』世織書房
藤井忠俊2009『在郷軍人会——良兵良民から赤紙・玉砕へ』岩波書店
逸見勝亮1990「少年兵史素描」『日本の教育史学』33号 pp.112-132
松本武祝2005『朝鮮農村の＜植民地近代＞経験』社会評論社
宮崎聖子2008『植民地期台湾における青年団と地域の変容』御茶の水書房
宮崎聖子2006「元台湾人特別志願兵における「植民地経験」」五十嵐真子・三尾裕子編
『戦後台湾における「日本」——植民地経験の連続・変貌・利用』風響社 pp.61-92
吉田裕2002『日本の軍隊——兵士たちの近代史』岩波書店
頼泰安1983『少年飛行兵よもやま物語』光人社
六十期生会編1978『陸軍士官学校第60期生史』発行者 六十期生会、発行所 財団法人偕行
社内

中文

- 林蘭芳1996「日抛末期台湾「皇民奉公」運動(1941-1945)」『中華民國史專題論文集』
pp.1193-1236
周婉窈2003『海行兮的時代——日本殖民統治末期台湾史論集』允晨
楊雅慧1993.6「日抛末期的台湾女性与皇民化運動」『台湾風物』43卷2期 台湾風物雜誌社
pp.69-84